

## 短編映画『気和』 高尾山の風景を描く

Short movie < Qihe >  
Scape of Mt. Takao

気和制作委員会  
SHANG YINGQI<sup>1)</sup>

指導教員 栗野由美<sup>1)</sup>, 研究協力者 相馬優希乃<sup>2)</sup> XU XIAORAN, ZHUANG YIZHOU

1) 東京造形大学造形学部デザイン学科メディアデザイン専攻領域

キーワード：八王子，高尾山，夏，映像

### 概要

大学に通うために八王子市内に居住した頃、京王線内で高尾山の広告を見た。その景色に心惹かれ、高尾山のさまざまな道を散策してみた。風景の美しさや、そこで出会う人々の姿に感動し、忙しい日々の焦燥感から離れて気分が落ち着くのを感じた。その経験を映像で描きたいと考え、八王子をロケ地とした短編映画を制作した。この映画を通して、精神を落ち着かせて最善の状態の問題を解決することが大切だということを伝えたい。

### 1. はじめに

こんにちの生活は、毎日の情報量が多過ぎて落ち着くことがなく、速すぎるペースにストレスを感じている人々も少なくないだろう。そういう中では感情の安定を保つことが難しく、精神的に悪循環に陥りやすい。筆者自身、大学の課題作品提出締切を前になかなか完成に至らない停滞に苦しみ、ネガティブな感情が理性でコントロールできなくなって、やるべきことがわからなくなったことがあった。ある時、かつて電車広告で見た高尾山に行ってみようと思いつき、ひとりでさまざまな道を歩いてみた。風景の美しさや、そこで出会う人々の姿に感動し、忙しい日々の焦燥感から離れて気分が落ち着くのを感じた。この経験から、自分の感情を適切にコントロールできれば、制作や仕事のミスが減らし、合理的に考え、自分の心に思い描いた目標に近づくことができるということを学んだ。そして、この気づきを多くの人に提案したいと思い、気が和む、という意味をこめて『気和』と題した映画を構想した。

### 2. 制作について

#### 2. 1. 制作工程

企画: 大筋→シナリオ→絵コンテ  
準備: キャスト、美術製作、ロケーション  
制作: 撮影→編集  
俳優 相馬悠希乃  
XU XIAORAN  
ZHUANG YIZHOU  
録音 ZENG CHENQING  
照明 平沼花梨  
LI HAIRUO

#### 2. 2. あらすじ

##### <シーン1>

音楽プロデューサーの董は部屋にこもって投稿作品制作に着手しようとしているが、期限が迫ってもまだ制作のインスピレーションが湧かず、行き詰まっている。気分転換のため、鞆から酒を取り出し、悩みを紛らわそうと企む。その時、高尾山の広告が目に入り、登山を思い立つ。

##### <シーン2>

高尾山に到着した董は、山頂に向かって歩き始める。しばらく歩いた後、ベンチで休憩し、少しでもアイデアが湧くかとノートを取り出して音楽制作を試みるも、やはり何も浮かばず、苦しんでノートをしまい、酒を飲んで気晴らししようとする。酒を飲んだ後、再び山頂に向かう。途中で下山している老人に道を尋ねたが、老人は理解不能なことを言った後、立ち去った。指された方向に進み山を登る。

##### <シーン3>

山頂に到着するとベンチを見つけ、再び音楽につい

て考え込む。すると突然、空き缶が投げ込まれた。堇は先ほど道に缶を置いてきたことを思い出し、反省して山を下り始める。途中で再び老人に出会い、今度は対話が成り立った。少し明るい心境になって家に戻ると、すらすらと制作がまとまり、出来栄えに満足して投稿した。晴々とした気持ちで発表上映会に臨む。

### 3. 評価と検討

企画と準備：高尾山で心が浄化された感動を映像化したいが、自然美を中心に据えた賛美的な映像表現により広告的になることは避けたいと考えた。高尾山でのロケーションは登山道と山頂、主人公がこもる部屋としてスタジオを借り、発表会の場所は東京造形大学の教室を借りた(図1)。

撮影と編集：撮影・編集とも自分で行った。ロケーション撮影にはスタッフの協力も得たが、時間とともに変化していく自然中のもので、短時間のうちに必要なカットを撮り切る難しさを実感した。また、全体を見る監督と部分を撮るカメラマンの役割を兼任することの難しさもあった。まだ実写撮影の経験が少なく、撮影後のラッシュで問題点に気付くことが多々あった。高尾山のシーンでは、編集段階で雨に漏れるカットなどシーンのつながりに問題があることに気がついて、追加の撮影を必要とした。また、光や想定外の影の問題もあった。協力スタッフたちとラッシュに対する意見交換を重ね、修正計画を立てて、俳優への追加撮影スケジュール調整なども要した。こういう制作工程で分業ができれば、タスクへの集中だけでなく、専門技術をもつカメラマンに撮影を任せることで、映像品質の面で、魅力的なカットを残せるという期待もある。

### 4. まとめ

『気和』制作は、私にとって貴重な経験であった。事前の準備、スタッフの動員、撮影の細部など、多くの学びが含まれている。

良い脚本は良い映画の基盤だが、脚本を書く際に、何となく理解しづらい部分があるという一般的な問題がある。そのため撮影時にはストーリーテリングのリズムを把握することが重要で、物語の展開を視聴者が心地よく感じるリズムで描くことが大切である。また、限られた資源下で表現を最大化するためには全体的なバランスを考慮して、何かしらの妥協が必要となる。すなわち、時間的、予算的、スタッフ動員的な面での撮影コストを特に表現したい箇所に集中配分する意識が必要である。今作では表現のリアリティのため美術セットに予算をかけた。『気和』制作での学びを次作に活かしていきたい。

### 5謝辞

制作にあたり、DAI CHENGRONGさん、堀越千恵美さん、Miro Sallyさん、YU JIERUIさんにもご協力いただいた。ここに感謝を申し上げる。



図 上から、高尾山シーン、自宅の室内シーン、発表会場シーン